

特別支援学級 体育科学習指導案

令和5年11月15日（水）5校時 体育館

のぞみ学級 26名

授業者 T1

T2

支援員

研究主題：わかる喜び、できる喜びを味わい、主体的に運動に取り組む児童の育成

- 1 単元名 体づくりの運動遊び「多様な動きをつくる運動遊び」（用具を操作する運動遊び）
『ボールで体を動かそう』

2 体づくり運動の特性

- 用具を操作する運動遊びは成功体験を味わわせやすく、用具をつかむ、もつ、転がす、投げる、捕るなどの動きを、自然と繰り返し行わせることができる運動である。
- 用具の操作が苦手な児童でも楽しく取り組めるように、用具の素材や運動遊びの難易度を工夫することが必要な運動である。

3 単元の目標

知識及び運動	投げる、捕るなどの動きで構成される運動遊びを通して、運動の仕方を知ると共に用具を操作する動きを楽しむことができる。
思考力・判断力・表現力等	自己の能力に適した課題について解決の仕方を工夫することができる。
学びに向かう力、人間性等	約束や順番を守りながら運動したり、協力することのよさに気付いたりすることができる。

4 単元の評価規準と活動に即した評価規準

観点	単元の評価規準	学習活動に即した評価規準
知識・運動	・用具を使った簡単な運動遊びの仕方を知り、楽しみながら体を動かすことができる。	①ボールの扱い方を理解している。 ②ボールを使った簡単な運動遊びの仕方を理解している。 ③ボールを使った運動遊びの楽しさに気付いている。
思考・判断・表現	・使用する用具や運動の難易度を変えながら、楽しくできる運動遊びの行い方を選んでいく。 ・教員や友達のよい動きを見付け、真似することで、より楽しく運動遊びができる。	①ボールの種類や距離、高さなどの難易度を変えながら、より楽しい運動遊びができるように工夫している。 ②教員や友達のよい動きを見付け、自分の運動に取り入れようとしている。 ③友達のよい動きを見付け、素直に褒めたり、伝えたりしている。
主体的に学習に取り組む態度	・運動遊びにすすんで取り組もうとしている。 ・順番や約束を守って取り組もうとしている。 ・友達と協力して、用具の準備や片付けをしようとしている。 ・場や用具を適切に使用し、安全に気を付けて運動しようとしている。	①ボールを使った運動遊びにすすんで取り組もうとしている。 ②一緒に活動する友達を意識し、順番や約束を守ろうとしている。 ③自分の使う用具について、準備や片付けを協力して行おうとしている。 ④ボールの正しい扱い方や活動のルールを守り、安全に気を付けて運動しようとしている。

5 子どもの実態と教師の願い

(1) 子どもの実態

本学級は、1年7名、2年6名、3年5名、4年3名、5年2名、6年3名の計26名が在籍している知的障害学級である。中、高学年の児童はコロナ禍で用具や器械の扱いに制限がかかっていた時期を過ごしていたため、ボールの操作に不慣れな面が見られる。しかし、運動に対する意欲は高く、体育の時間ではどの運動にも前向きに取り組むことができている。低学年の児童は、友達と一緒に学習していることを理解できるように、きまりや約束事を確認しながら、運動の楽しさに触れられるように難易度の易しい運動から取り組むようにしている。

1学期にソフトボール投げのラインを使い、ボール投げに取り組んだ。児童の中には、両足が揃っていたり、腕の力だけで投げようとしていたりして、思うようにボールが飛ばない傾向があった。また、前に投げているつもりが、上や横にボールが飛んでいく様子も見られた。ボールを投げることに意欲を示しすすんで取り組んだが、運動のぎこちなさなどから思い通りに投げられない姿が多くの子から見られた。

(2) 教師の願い

- 用具を操作する運動遊びの楽しさに気づき、体を動かすことの心地よさや上手にできた時の喜びを感じてほしい。
- 体の様々な部分を使い、用具を操作する基本的な動きを身に付けさせたい。
- 安全に気を付けた運動の仕方を考えられるようになってほしい。
- 友達と協力する楽しさや必要性を感じてほしい。

6 研究主題に迫るための手だて

(1) 指導計画の工夫

①「つかむ段階」「とりくむ段階」の設定

本学級の児童は、運動遊びの仕方を理解したり実践できるようになったりするのに時間がかかる傾向にある。そのため、運動遊びに慣れる時間を十分に確保するため「つかむ段階」を2時間、「とりくむ段階」を6時間として計画した。

「つかむ段階」では、ボールの扱いや簡単な操作について指導する。ボールを体の周りで回したり、足元にバウンドさせたボールを捕ったりして、ボールの操作に慣れさせていく。また、ボールを使う上での話の聞き方や安全な使い方等、約束事を押さえられるようにする。

「とりくむ段階」では、より一層ボールの操作に慣れたり運動遊びに挑戦しようとしていたりできる時間を設定した。的当てやシュートゲームなど、ゲーム性のある内容を設定することで、児童が意欲的に体を動かせるようにした。また「とりくむ①」「とりくむ②」の時間に分け、「とりくむ①」では投げたり捕ったりする運動遊びに、「とりくむ②」では運んだり転がしたりする運動遊びに重点的に取り組めるようにする。活動の仕方について、理解や習得に時間がかかる児童がいるため、同じ動きに繰り返し取り組めるような指導計画とした。

②グループ指導

児童の実態に合わせた指導が行われるよう、グループに分かれての指導を設定した。児童の能力に応じた4つのグループを編成することで、より児童の実態に合わせた指導ができ、「わかる」「できる」を実感させられると考えている。また、児童が同じグループの友達を意識することによって、投げ方や捕り方のよさを高め合うことができると考えている。

(2) 指導方法（対話的な活動の取り組み、言葉掛け、学習の場）の工夫

①対話的な活動

本学級の実態として、自分の考えをまとめて話したり、自分の工夫を言葉で表現したりすることが難しい傾向にある。そのため、対話的な活動を充実させるために、教員が児童のよさを価値付け、他の児

童に広めていくようにする。児童同士が互いのよさに気付いたり、学び合ったりできる雰囲気づくりを教員が率先して行う。

②言葉掛けの工夫

〈粘り強く取り組ませる言葉掛け〉

本単元の学習活動では、成功と失敗が分かりやすいという特徴がある。そのため失敗した際には、その運動が苦手、嫌いだと捉えてしまう児童も少なくない。事前に成功するまで挑戦できることを伝えたり、上手いかない時は距離や高さ、ボールの素材を変えてもよいことを指導したりして、「できた」を実感できるまで取り組めるような言葉掛けをする。

〈過程を評価する言葉掛け〉

できなかったことが、学習を通してできるようになった際には、その結果だけでなく過程も価値付けるようにしていく。「何度もあきらめずに挑戦できてよかった」「ボールを別のボールに変えたからできるようになった」「投げ方を工夫できたのがよかった」など、成功に向けた児童の努力や工夫を評価する言葉掛けを行っていく。

〈ボール操作に関する言葉掛け〉

ボールの操作を指導する際には、児童の目線に合わせた言葉を選択する。ボールを捕る動きでは、「ぎゅっ」「だっこ」などの分かりやすい言葉を用いたり、「両手と胸の3点で抱えるようにするよ」といった使う体の部位を示したりする。言葉と動作が結び付くように、教員が手本を見せるようにし、視覚的にも支援をすることで「わかる」を実感させていきたい。

〈体づくり運動としての言葉掛け〉

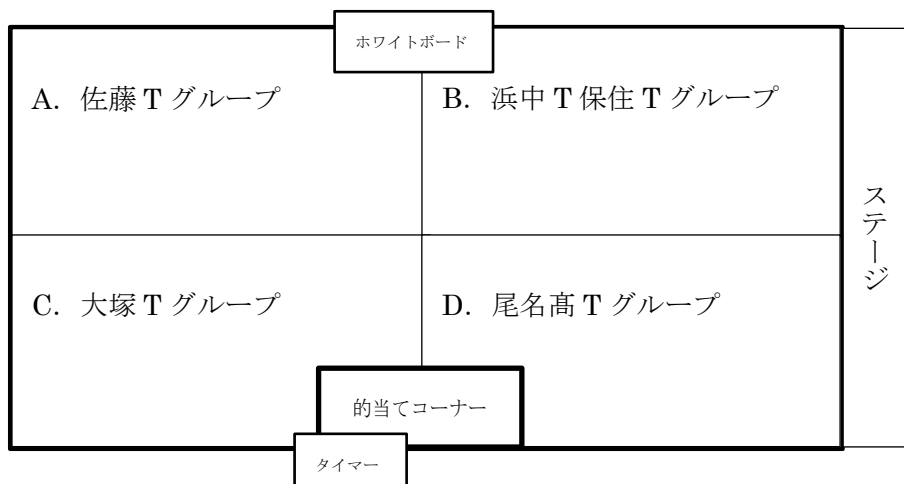
的当て運動や玉入れ運動等のゲームの要素を含んだ活動では、勝敗や競争が重点で意識されると体づくり運動としてのねらいが損なわれてしまう。成功した数（点数など）を評価して意欲を引き出すことは分かりやすく効果的な面もあるが、多く成功できたからよいといった指導にならないよう言葉掛けには配慮したい。

③学習の場の工夫

体育館を4分割してグループ指導を行うため、他のグループの活動が気になることが予想される。教員が説明や指示を行う際には、壁側に立って話すことで児童の注意を引き付けるように配慮する。また、他の活動に興味を示して注意が散漫にならないようにしたい。今後できることを伝え、今すべき活動に集中させる。

安全についても配慮する。ボールを投げる方向を工夫したり、他のグループの活動を横切らないよう指導したりする。

※各グループの児童の実態については（9 本時における各グループの情報）を参照



7 指導計画

年間指導計画

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	時間走						持久走		時間走		
体づくり 運動の領域	体を移動する 運動遊び 鬼遊び	体ほぐしの 運動遊び	体のバランスをとる 運動遊び ケンステップ、平均台を 使ったサーキット運動			用具を操作する 運動遊び（本時） ボール グループ学習	用具を操作する 運動遊び 短縄跳び 長縄跳び		力試しの運動遊び 押す、引く、運ぶなどの サーキット運動		
その他の 運動領域		表現リズム遊び 運動会練習	水遊び 水泳		器械・器具を使 っての運動遊び マット運動 固定遊具、鉄棒	走・跳の運 動遊び ハードル走			ゲーム キックベース		
音楽科との 関連	リトミック										

単元の指導計画

段階		つかむ		とりくむ①			とりくむ②		
時間		1	2	3	4（本時）	5	6	7	8
学習活動		全体 ①集合・整列・挨拶 ②準備運動 ③時間走 ④ムーブタイム							
		○約束の確認 ・用具の扱い方 ・順番 ・安全 ○場の準備 ○グループ指導		グループ ⑤場の準備 (A、B グループ) (C、D グループ) ・的当て運動 ・玉入れ運動 ・キャッチボール			グループ ⑤場の準備 (A、B グループ) (C、D グループ) ・ボール運び ・ボール転がし ・協力ボール運び ・的通しボール転がし		
		全体⑥片付け ⑦集合・整列・整理運動 ⑧振り返り ⑨挨拶							
運動が苦手な児童への配慮例		・体の動かし方が分かるように、教員が手本を見せるなどの支援を行う。 ・使用するボールについては、児童が扱いやすい物を選ぶように、素材や大きさの違うものを複数用意する。 ・ボールを捕ることに恐怖心がある児童には、距離を短くするなどの配慮をする。							
学習活動に即した評価基準	知運	1・3		2・3			2・3		
	思判表	2		1・3			1・3		
	態度	1・4		2・3・4			2・3・4		

8 本時（全8時間中の 4 時間目）

（1）本時の目標

【知識、運動】ボールを使った運動遊びの仕方が分かり、楽しく体を動かすことができる。

【思考力、判断力、表現力等】ボールの種類や活動の難易度を変えながら、より楽しく運動遊びをしようとしている。

【主体的に学習に取り組む態度】順番や約束を守って、安全に取り組もうとしている。

（2）本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・個別の支援	評価内容（評価方法）	
導入 15分	1 集合、整列、挨拶 2 準備運動 3 時間走（3分） 水飲み休憩 4 ムーブタイム（5分程度） ・ボールストレッチ ・ボールハンドリング	・集合の位置が分かるようにケンス テップを置く ・予め準備運動ができる広さで整列 させておきスムーズに始められる ようにする ・止まらずに走ることを意識させる。 ・水を飲んだらすぐに集まるように 指導する。 ・教員の「始め」「やめ」の言葉掛け に従ってボールを操作するように 指導する		
展開 20分	【グループ学習】 5 準備、めあての確認	・グループでめあてを確認する。	・順番や約束を守って、安全 に取り組もうとしているか（取り組む様子）	
	A. 佐藤 T ・投げ上げてキャッチ 自分で投げたボール を自分で捕る動きを 楽しむ。 ・セストボール玉入れ 玉入れ遊びをする。 ・的当て（4分） ルールを守って的に 当てる運動を楽し む。 ・キャッチボール ペアでボールを投げ たり、捕ったりする 運動を楽しむ。	B. 浜中 T、保住 T ・的当て（4分） 投げる運動に楽し む。安全に気を付け て運動する。 ・キャッチボール運動 ボールの種類や距離 を選び、自分で捕り やすいようにボール を捕る。 ・シュート運動 ボールの種類や距離 を選びボールを投げ 入れる。 ・セストボール玉入れ 玉入れ遊びをする。	C. 尾名高 T ・投げる運動 壁に向かって、高さや 距離、片手・両手など いろいろな投げ方を する。 ・的当て（4分） 的をよく見て投げる。 力や距離を変える。倒 すことを楽しむ。 ・受け取る運動 投げ上げたりついた りしたボールを、他の 運動を加えて取る。 ・受け取ったボールを 相手を意識して投げ、 受け取る列に移動す る。	D. 大塚 T ・キャッチボール 様々な形態のキャッ チボールを楽しむ。 ・目隠しキャッチ 座ったまま仕切りを 挟んでキャッチボ ールをする。 ・セストボール玉入れ 力や角度を調節した り、バウンドさせたりしてボールをゴール に入れる。 ・的当て（4分） 投げるボールの種類 を変えて、的当てを 楽しむ。
	6 片付け	・協力して片付けられるようにする。		
まとめ 10分	7 整列、整理運動 8 振り返り 9 挨拶	・児童の頑張りや成長を価値付け、教 員が全体に伝えるようにする。	・ボールを使った運動遊び の行い方が分かり、楽し く体を動かすことがで きたか（取り組む様子）	

◇本時における各グループの情報

A. 佐藤 T グループ

1年生7名（男子6名、女子1名）のグループである。全体的に運動への意欲は高いが、多動傾向、自閉傾向など、行動に配慮すべき児童が複数在籍しているのに加え、学習中に体育館から逃げ出すなど、学習の構えができていない児童が1名いる。同学年のみのグループであることから、運動能力の差が大きく、個々の能力に応じた活動を設定する必要がある。運動を行う上での約束や決まりを身に付けさせながら、主体的に運動遊びに取り組めるよう支援していく。

B. 浜中 T グループ、保住 T グループ

2年生5名（男子3名、女子2名）のグループである。女子2人は身体的な理由から特に支援が必要な児童であり、男子3名とは活動内容を分けて取り組ませる必要がある。担任と支援員とで分担し、より児童の能力に応じた活動を設定していく。本グループのねらいは、約束や決まりを守りながら楽しく運動遊びに取り組むことである。約束や決まりが正しく分かるような指導と支援をしていく。

C. 尾名高 T グループ

2年生1名、3年生3名、4年生・5年生・6年生各1名のグループである。少しの高さまで投げ上げたボールをキャッチしたり、近距離なら友だちが投げたボールをキャッチしたりできるレベルのグループである。教員が示範することで、やることはおおむね理解でき、進んで取り組もうとする。体の動かし方にぎこちなさがある児童もいる。目的に応じて必要な支援をしていく。

D. 大塚 T グループ

3年生2名、4年生1名、5年生1名、6年生2名の計5名のグループである。ボールを投げる、捕る動きが比較的できるグループであるため、本時では様々な制約のあるキャッチボールや、2種類の的当てに楽しみながら取り組む予定である。様々な投げる、捕る運動を試してみたいように、ボールの投げ方や捕り方への工夫、ボールの種類を選択できるなどの支援をしていく。

9 成果と課題

(1) 成果

①「指導計画の工夫」

- 単元の指導計画を「つかむ段階」「とり組む段階」に分けたことで、児童が十分に理解しながら取り組めていた。また、「とりくむ段階」を全6時間で設定することで、児童が活動内容に慣れ、見通しがもてることで意欲的に参加する児童が多く見られた。
- 授業の前段でムーブタイムを設定し、主運動に繋がる易しい動きに取り組ませるようにしたことで、児童がすすんで学習に参加する姿が見られた。易しい動きから取り組むことが、子供の「やってみよう」「これならできる」という気持ちを引き出すよいきっかけとなり、その後の発展的な動きにもスムーズに繋げることができた。
- 児童の実態に合わせてグループを編成したことで、より個に応じた学習を設定できた。

②「指導方法（対話的な活動の取り組み、言葉掛け、学習の場）の工夫」

- 様々な種類のボールを用いることが多様な動きにつながっていた。大きさや硬さの違うボールを用意したことで、児童が扱う用具を選択でき、思考判断しながら運動に取り組むことができた。
- 新聞紙を丸めて作製したボールが効果的であった。ボールの柔らかさから受け手の恐怖心を和らげたり、転がりにくいという性質から回収しやすかったりと、学習において高い効果を発揮していた。

- ・児童への言葉掛けでは、「ふわっと」「ぎゅっと」等のオノマトペで指示することが効果的であった。実際に教員が手本を見せながら、こうした表現で伝えるようにすると、下学年の児童でも真似をして取り組むことができていた。
- ・4グループでの指導であったが、全グループが壁に向かって指示を聞いたり活動したりするようにしたことで、視覚的に注意が逸れたり、他グループにボールが飛んで行ったりすることが無かった。

③「主体的に取り組む」姿

- ・単元終了後に、「またやりたい」という声が児童から多数聞けたことから、主体的に取り組めていたことが分かった。児童からこうした声が出てきたことで、指導計画の工夫や指導方法の工夫が効果的であったことが分かった。

(2) 課題

◇「指導計画の工夫」

- ・本単元では、用具を操作する運動を全8時間で計画し実施した。児童の理解には必要な時間設定であったが、その他の運動領域や指導内容についても十分に指導できるよう、年間における時間配分を考慮する必要がある。

◇「指導方法の工夫」

- ・児童の運動に対する理解や安全の確保から、指示や説明に時間が掛かったり同時に取り組ませることが困難だったりすることから、運動量を十分に確保できない場面があった。

(3) 指導講評 講師：元筑波大学教授 こども家族早期発達支援学会副会長 松原 豊先生

- ・体育科の指導では、技術や能力の向上に偏ることなく、運動の楽しさを味わわせたり、生涯に渡って運動に親しもうとする態度を養わせたりする等、バランスの取れた指導をすることが重要である。特に障害のある児童などについては失敗経験を感じやすいため、指導方法の工夫をして運動の楽しさや気持ちよさを感じ取らせることが大切である。
- ・アダプテッド体育（スポーツ）の考え方から、体育に参加する個々人の実態に合わせて用具やルール、教材、教材の提供の仕方を修正したり創造したりすることが大切である。運動の内容については、児童の実態に合わせた難易度を設定できるようにしたい。
- ・指導をする際には、運動を「確実にできる課題」「少しの後押しでできる課題」「今はできない課題」の3つの課題レベルに分けて考えるようにし、「少しの後押しでできる課題」に多く取り組ませることで児童に成功体験を積ませることができる。
- ・準備運動では、アキレス腱を伸ばしたり腕を回したりする運動は、児童から見て横向きに立って行うことが効果的である。横向きで手本を見せることで体の動かし方が伝わりやすくなり、児童が正しく模範できるようになる。
- ・ボールを使用した運動の実践例。

的当てでは、的を大きくして当たりやすくしたり、様々なボールを用意したりすることで、成功の確率が高まり児童が意欲的に運動できるようになる。また、天井からボールを吊るし振り子のような状態にすることで、的に当たりやすくなると共にボールを回収する手間を省くこともできる。

サーキット運動で活動させる際には、児童が親しみやすいテーマを決めることが効果的である。例えば、「スペース大作戦」「忍者の修行」等を設定することで、児童が目的意識をもって楽しく運動できるようになる。運動自体が目的でなく、自然と運動に取り組んでいるような場や活動の設定ができるとなお児童の意欲を引き出すきっかけとなる。